

障害福祉を考える

思いやりのある社会に



9月5日、教育センターで第2回福祉大会が、心身障害者を持つ親や民生委員など、約200人が参加して開かれました。

54年度から始められる障害児の義務教育。ミニコロニーの建設など、今、障害福祉の問題が大きくクローズアップされています。

市での現状と、大会での中村与吉氏の講演などを紹介しながら、私たちが今後、これらについてどのように取り組むべきか、考えてみたいと思います。

市内には現在、身体障害者手帳を持っている人が八百六十四人。精神薄弱者の療育手帳を受けている人が五十八人います。

交通事故などによって手足の機能を失った人、病気のため心臓や肺の機能に障害を持つようになっただ人、生まれつき手足の不自由な子ども、言語・聴力・視力に障害のある人、さらにはいろいろな障害が重複している重症心身障害者など、数えあげればきりがありません。さまざまな障害に苦しむ人たちが、私たちのまわりには多くいます。

意欲と努力も

このなかには自らその不自由を克服して立派に社会人、家庭人として活躍している人も少なくありません。

しかし、障害を持つ人の大部分は、社会においてたいへん不利な条件を負わされています。

このハンディキャップを少しでも軽くし、社会活動に参加できるようにすることはもちろん、障害を持った人たちも社会の一員であり、生活の欲求は何ら健康な人と変わるものではありません——こうした認識に立って、私たちは福祉施策を展開して行かなければなりません。そして障害を持つ

た人たちが、明るく生きがいのある生活ができるようにするには——

①行政の積極的援護 ②障害者自身の自立への意欲と努力 ③お互いの問題として障害者を理解した地域社会——

この三つの力が一体となって、初めて実現されるのではないのでしょうか。

援護の手を

市でも単独、あるいは国、県、関係市町村と連携をとりながらこうした人たちの援護を進めていきます。

第一にはまず、心身ともにじょうぶな赤ちゃんの出産です。そのためには健全な母体づくりが大切な母子栄養強化ミルクの支給もこうしたことから、他市町村に先がけて実施しているものです。

また、妊娠中毒症は精薄児の発生原因ともいわれています。そのため毎月、妊婦検診を実施し、適切な指導を行っています。

障害を少しでも軽くするには、なんといっても早期発見、正確な処置ということが大切です。三か月、六か月、三歳児検診に加え、五十二年四月から一歳六か月児検診を行い、早期発見に力をそいでいます。

このほか、重度心身障害者の医

功労者を表彰 福祉大会で

大会の席上、福祉活動に尽力してこられた、次の人たちが特別功労者として表彰されました。

- ▼石黒ウメさん(新飯田下町)
- ▼佐野スギさん(富海)
- ▼平山ギンさん(下道湯)
- ▼小林豊平さん(浦梨)
- ▼丸山ノリさん(下木山)
- ▼小林ハルさん(高井野)
- ▼斎藤リセさん(曙町)
- ▼中山ハツさん(彌ヶ通)

施設建設の運動

本市をはじめ、新津、五泉市などがいつしよになり、「中東蒲原地区にミニコロニーの早期建設」と県へ訴えています。

関係市町村では「なんとか五十五年度から着手を——」ということで、村松町のふなおか学園付近に、十平方分の用地を今年度中に確保し、五十四年度に造成する計画を立て、現在、精力的に取り組んでいます。

記念講演 中村与吉氏 障害者の現状と 今後の課題

私たちが今、福祉、福祉といいますが、第二次世界大戦前には社会事業とか慈善事業ということばは聞きましたが、福祉ということばはなかったようです。

昭和二十一年に児童福祉法というものができまして、あと老人福祉法とか心身障害者の福祉法などが次から次と、施行されてきたわけです。

だれかがやらねば

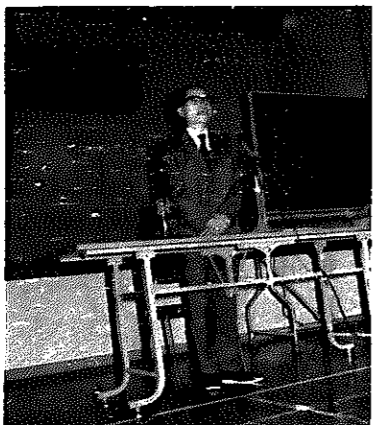
ご存知のとおり福祉活動というのは、一人でできるものではないと思います。しかしだれかがやらなければならぬ仕事です。

そのだれかの一人ひとりが今日ここに集っておられる皆様だと思っております。

しかし、皆様が福祉という大きな問題に取り組んでいこうとする時、自分一人の力では大変だとお考えになることが、きつとあると思います。

私はそんな時「だれかの一人と

なつてこの仕事を進めなくてはならない——」という観点に立ち、障害児保育あるいは障害児の福祉というものに取り組んでいるわけです。



▲十字園々長 中村与吉氏
十字園は、新潟市の上野栄町に49年5月から開園した、精神薄弱者更生施設です。定員は60人で全員が宿泊して指導を受けています。

施設も必要ですが

今、県内では心身障害のうち身体の不自由な人が、三月末現在で約九万人。知恵おくれの人が約九千三百人ほどいらつしやいます。

このような人はどのように処遇されているかといえますと家庭病院、福祉施設などの場で福祉というものが保障されています。

みんなの理解が

しかし私は、ここに一つ大きな矛盾を感じることがあります。それは「これこれこれだけの心身障害者がいるから、それにみあうだけの施設をつくれば、それで彼らの辛さというものが保障できる」という、非常に安易な考え方が一部にあるということです。

心身障害者の施設というものは確かに必要です。しかしそれに先

だつて大切なのは地域社会、一般の人たちの理解が一番必要なのではないでしょうか。

ことに今までのこうした施設というものは、たいてい人里離れた山のかたに建てられるのです。そして彼らは家庭や町、村を離れて、そうした施設に隔離され生活しているのです。

私たちが、彼らを理解しなければならぬという前提に立ちながら

特別の目で見ないで

ご存知のとおり、来年の四月一日から精神薄弱児の養護学校が、義務設置になります。

今まで知恵おくれの子どももなかで、六歳になつても学校へあがることのできない子が、ずいぶんと多かつたわけです。

しかしもうあとわずかで、知恵おくれの子であっても、堂々と学校へ通えるようになるのです。

だがしかし、私たちがこういった学校を何か特別の目で見るということであつては、せつかくの制度ができたとしても実を結ばないと思います。

特殊学級を担任して

私が昭和二十二年に新潟市で初めて特殊学級を担任しました。

ところが一学期も終わつて二学期に入つたある日の晩、玄関に私が受けてもつてくる子どもの母親が

暖かい励ましを

立っていました。

私は「こんな夜ふけになんかどうです」とたずねました。するとその母親は「私は一生懸命に働いて夜こんなおそく銭湯へ行きます。ところがそこで、二人のある人が、今度、何々中学校に特殊学級ができたそうだが、あんなの子もうちの子もその学級に入らないで辛さだねといっていました。それを聞いたら——」と、オイオイと泣きながら、苦しい胸のうちをうちあけにきたのです。その一言が、どんなに強く母親に響いたことでしょうか。

せつかくその母親が、自分の意を決して子どもを特別の学級に入れて教育をする——このことを周囲の人たちが暖かい目で見、激励してくれたなら、こんな結果にはならなかつたのです。

どんな施設や学校ができて、まずみんなの人が理解してこうした人たちが暖かくつむこと——これができなければ何十億、何百億円のお金を、そのためにそいだとしても、それは本当の人間の辛さにはつながらないと思います

講演の一部をまとめてみました